

【学校教育目標】 自ら学び 心豊かで たくましい 豊里っ子の育成



- 《めざす児童像》
- 【と】 友達と仲良くする子
 - 【よ】 よく勉強する子
 - 【さ】 最後まで頑張る子
 - 【と】 とっても元気な子



題字の「とよさと」は、〇年 〇〇〇〇〇〇〇さんが書いてくれました

〇年 〇〇〇〇〇〇〇さんの作品

唐突に感じられるかもしれませんが、今回は、教員と保護者の間で、なぜか話が食い違った場合の難しさについてお話させてください。

教員がいくら子どもたちに気を配っているとは言っても、教員にも行き届かない点があります。開き直るつもりはありませんが、私自身もそういったところがあります。

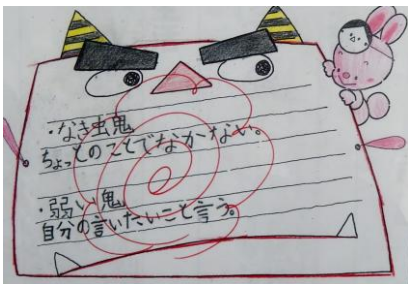
例えば、こんな場合はどうでしょう。「先生が子どもを注意する→子どもは先生がひどいと家と言う→保護者は先生を許せないと思う」、そんなとき、それを聞いた保護者が不快な感情をもつのは自然だと思います。気持ちはよくわかりますが、よく聞くと、そもそも色合いの違った話である場合も多く、教員の言い分に理がある場合もあります。ただ、はっきりしているのは、「子どもがそう感じた」ということで、それを大切にすることはありますが、子どもの言い分を冷静に聞く必要がある場合もあります。理由があり、教員が注意深さをもって指導したことでも、子どもはそう感じたのでしょ。他によい方法があったのかもしれない。

子どもも自分にとって都合の悪いことは言いたがりませんし、心配してほしくて保護者に言い募る場合もあります。感情にまかせ、子どもの話を鵜呑みにしすぎても、話が違った方向に行ってしまう可能性もあります。たとえ、普段信頼している先生であっても、信頼というのは儂いものです。

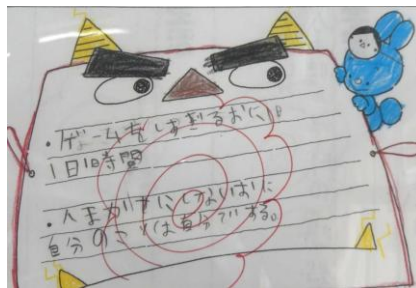
少し距離を置いて考えると、だれも悪くなかったことがわかることもあります。お互いに感情を抑えつつ、疑問に思ったことを聞いていただければ、子どもを育てるという意味で、いい関係が築けるように感じています。 七福神→



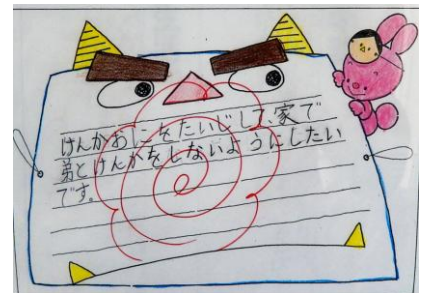
※なくしたいオニ(節分にちなんで) 〇年生



〇〇〇〇さん



〇〇〇〇さん



〇〇〇〇さん

読書イラスト大会

好きな本、おすすめの本をイラストで紹介しました



〇年 〇〇〇〇さん



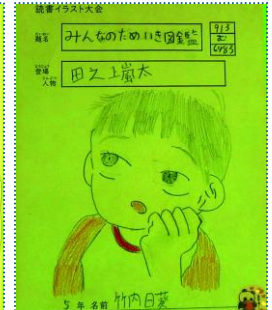
〇年 〇〇〇〇さん



〇年 〇〇〇〇さん



〇年 〇〇〇〇さん



〇年 〇〇〇〇さん

※読書賞

〇年 〇〇〇〇〇〇〇さん 〇年 〇〇〇〇〇〇〇さん
1000P 〇年 〇〇〇〇さん



※銚子市小中学校書初展 佳作

〇年 〇〇〇〇〇〇〇さん 〇〇〇〇〇〇〇さん 〇年 〇〇〇〇〇さん 〇年 〇〇〇〇〇さん
〇年 〇〇〇〇〇さん 〇〇〇〇〇さん 〇年 〇〇〇〇〇さん 〇年 〇〇〇〇〇さん 〇〇〇〇〇さん